

国際融合文化学会

International Society for Harmony & Combination of Cultures

ISHCC ニュースレター 第6号 (2001.12.24)

モットー：全ての生あるものがその「生」を享受し全うしうる調和を創造すること

ISHCC 国内第三回大会が京都で開催

10月27日から10月28日にかけて、国内第三回大会となる2001年秋の京都大会が、京都の関西セミナーハウスで開催されました。会場となった「豊響殿」は、明治三十一年（1898年）に豊臣秀吉の三百年祭のために建てられた能舞台であり、めぐり巡って関西セミナーハウスに移築され、修復されたものです。今回は会員の研究活動の口頭発表、パフォーマンス発表に加え、9月11日にアメリカで起きた同時多発テロ事件、その後の戦争状態を受けて、世界平和を考えるディスカッションを催しました。さらに二日目の午後には、この伝統ある能舞台で、上田（宗片）会長による英語能舞が上演され、観ている者は、魂に響く謡い、そして象徴的で厳（おごそ）かな能舞から、魂の救いのなんたるかを、感動として心に受け留めました。紙面終わりに載せた観客の感想文は、何よりその素晴らしさを語っています。また、英語能舞公演については、日本大学大学院総合社会情報研究科ホームページの電子マガジンで紹介されています。

<http://atlantic.gssc.nihon-u.ac.jp/~e-magazine/006/gakkai-tomura.htm>

下記は今回発表された研究発表の題目です。

(2001年10月27日)

ISHCC 国内第三回大会 研究発表テーマ（各自持ち時間 20分）		
1	口頭発表： 近代京都にみる融合の精神 --- 伝統産業のあり方から ---	京都工芸繊維大学大学院 工芸科学研究科 博士後期課程 山田 由希代
2	口頭発表： 21世紀における精神世界の発展 --- 『聖なる予言』の場合 ---	日本大学大学院 総合社会情報研究科 修士課程 三輪 京子
3	口頭発表： 融合文化論研究 --- シェイクスピア能の場合 --- No.2 「シェイクスピア能」の進化	同 西岡 妙子
4	口頭発表： 東西の自然観と能『高砂』 --- 環境問題に関連して ---	同 渡辺 直
5	口頭発表： 手話辞典の歴史	同 竹村 茂
6	口頭発表： ソローの東西思想の融合化における意義	愛知学泉大学 教授 山田 正雄
7	ディスカッション： テロ、戦争と平和を考える	日本大学大学院 講師 静岡大学 講師 Marcus Grandon

(2001年10月28日)

ISHCC 国内第三回大会 研究発表テーマ (各自持ち時間 20分)	
8	パフォーマンス発表： 天理教のてをどり --- 実演と解説 --- 日本大学大学院 総合社会情報研究科 修士課程 渡辺 治則
9	口頭発表： 白河地方における和泉式部伝説と和歌との 関係について 日本大学大学院修了 修士 高野 祥子

(2001年10月28日)

ISHCC 主催 能舞公演 (14:30 開演、15:30 終了)	
10	<p>能舞： 『英語能舞・ハムレット』短縮版</p> <p><i>Noh Hamlet in English (Abridged)</i></p> <p>原作： William Shakespeare 能台本： 上田 (宗片) 邦義 節付： 上田 (宗方) 邦義</p> <p><u>シテ (ハムレット):</u> 上田 (宗片) 邦義 (日本大学大学院 教授)</p> <p><u>ツレ (オフィーリアの亡霊):</u> 宮西 ナオ子 (日本大学大学院 総合社会情報研究科 修士課程)</p> <p><u>尺八:</u> Marcus Grandon (日本大学大学院 講師 静岡大学 講師)</p> <p><u>後見:</u> 足立 禮子 (能楽師)</p>

国際融合文化学会 (ISHCC) のロゴマーク決定

上記の京都大会では、学会のロゴマークについて提案があり、参加者全員の拍手を持って承認されました。この図案を考案したのは、日本大学大学院総合社会情報研究科修士課程の戸村知子さんで、



マークのコンセプトについて、「能」を、融合文化を象徴するものの一つとして捉え、「四角はフラットなステージを、丸は宇宙的時間を、三角のグラデーションは「能」のシンボルとしての扇で、文化の相互理解が広がっていくさまをあらわしています。」と語ってくれました。

国際融合文化学会 (ISHCC) が、このロゴマークのように、諸文化の相互理解に貢献していく場となっていくことを期待します。

次回 ISHCC 大会は沼津にて開催 (2002年3月9日から10日)

次回の ISHCC 大会は、2002年3月9日 (土) から3月10日 (日) にかけて、静岡県沼津市の「KKR 沼津はまゆう」(<http://www5.ocn.ne.jp/~kkh-hama/annai.htm>) にて開催予定です。

お問い合わせは、菊地善太 (電子メール: 2001c03@gssc.nihon-u.ac.jp) 迄お願いいたします。

国際融合文化学会 (ISHCC) 学会誌創刊号の原稿募集

以下の要領で学会誌創刊号の原稿を募集致します。奮ってご応募ください。

お問い合わせは、竹村茂 (電子メール: 2000c14@gssc.nihon-u.ac.jp) 迄お願いいたします。

『融合文化研究』 原稿募集要項

編集規定

1. 会員の国際融合文化に関わる研究論文の発表の場として、学会機関誌を創刊し、以降原則として年2回発行していくものとする。学会機関誌の名称は『融合文化研究』とする。
2. 投稿の資格は、投稿時点で、その年度の会費を納入している国際融合文化学会の会員に限る。
3. 原則として年に2回論文を募集する。募集期間については都度、学会事務局(または編集委員会)より連絡するものとする。
4. 応募論文は融合文化に関連するテーマであることが望まれる。応募論文は学会誌等に未発表の論文であること。但し、口頭発表済だが学会誌等に論文投稿していないものについては、その旨明記していれば審査の対象となり得る。
5. 原稿の採択および掲載順は、審査委員会(編集委員会が兼ねる)で査読の上、決定する。
6. 原稿の採択が決まった執筆者からは、学会機関誌発行にかかる費用の一部を、執筆者負担金として徴収する。写真印刷が必要な場合は、執筆者の負担として、別途必要な費用を徴収する。執筆者負担金の金額は5,000円とする。
7. 執筆者には『融合文化研究』5冊を贈呈する。また、希望者には抜刷りの印刷にも応じる。抜刷り印刷にかかる費用は、別途申込者から必要な費用を徴収する。
8. 投稿論文は返還しない。

執筆規定

1. 原稿の書式 Microsoft Word を使って原則として横書きで作成すること。
B5判 横書き 40字 32行 10.5ポイント
6枚以内(タイトル、注、図版等すべてを含めて)
余白(上25mm 下20mm 右20mm 左20mm ヘッダー15mm フッター10mm)
本文のフォントは、和文はMS明朝、英文はCenturyとする。英字と2桁以上の数字は半角で入力すること。
2. 和文タイトルには、英訳を付けること。英文タイトルには、和訳を付けること。
タイトルのフォントは、和文はMSゴシック 14ポイント、英文フォントはCentury Gothic 14ポイントとする。
3. 和文論文には英文の要旨と付けること。英文論文には日本文の要旨を付けること。要旨は7~8行とする。
4. タイトルの後、1行あけて英文タイトルを入れ、1行あけて氏名を入れ、1行あけて要旨を入れ、2行あけて本文を書き出すこと。
5. 原則として、提出された原稿をそのまま版下とし、校正は行わない。編集委員会でページ付けと書式の統一を行う。
6. 原則としてE-mailの添付ファイルで提出すること。画像等を含んだファイルでサイズが大きいときは、CD-RまたはMOで提出すること。提出されたCD-RまたはMOは返還しない。
7. 執筆希望者はあらかじめサンプルファイルを下記よりダウンロードして参考にすることが望ましい。
<http://www2s.biglobe.ne.jp/~kem/sample/>
8. 本稿に規定されていないことは、『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』に準ずる。

【平成13年度の第一回の原稿募集に関して】

1. 締切： 2002年1月31日
2. 提出先 上田 邦義 ueda@gssc.nihon-u.ac.jp
竹村 茂 2000c14@gssc.nihon-u.ac.jp

* . 2人に同時にE-mailで送付すること。

『英語能舞・ハムレット』公演の感想文

以下、『英語能舞・ハムレット』公演につき、事務局に寄せられたご感想の一部を紹介します。

融合文化学会、英語能公演共に稔り多かった。発表は伝統工芸、精神世界、東西融合文化、文学、思想など多岐に亘り、どれも基底の部分で互いにつながりが感じられ、興味が尽きなかった。私も「てをどり」の実演と解説を通し、異なった面からの素材を披露した。英語能では見所での鑑賞はできなかったが、揚幕の後ろで囃子のテープをかけるお手伝いをさせていただき、シテやツレの動きに合わせてタイミングをとる難しさを知る貴重な体験ができた。 渡辺 治則、日本大学大学院 院生)

今回、私は生まれて初めて「能」を拝見し、それも英語による「能」を体験しました。それは戸惑いと共に大変な感動を受けました。もちろん上田先生をはじめ舞台に出ておられる皆さんの所作にはその感動が倍化しました。このすばらしい舞台に誘っていただいた上田先生はじめ菊地さんにここで感謝の意を表すと共に、当日お目にかかった方々に大変感謝致します。今後もこの素晴らしい融合文化を学んでいけるよう努力したいと思います。 (高木 左右、日本大学国際関係学部 学生)

今回の学会では、『英語能舞・ハムレット』公演のスタッフに加えていただきました。公演の仕事に携わるのは初めてで、自分の担当した仕事からだけでは、全体像をイメージできませんでしたが、本番を観て感動。ものを創り上げていく楽しさを知りました。協力していただいた方々の「公演を成功させたい」という共通のビジョンが、素晴らしい舞台を実現させたと思います。調和と融合を体験できた素晴らしい2日間でした。本業の学問をおろそかにしませんが、早くも次の企画を楽しみにしております。 (安田 保、日本大学大学院 院生)

オフィーリアを失い慟哭するハムレットは、「生きるべきか、死すべきか、それはもはや問題ではない」というときに至って「許し」の祝福を受ける。人と人とはやはりこの世では分かり合えないのであろうか。悲しい。しかし、天界に去って行くハムレットをおくる尺八の音に、風のさざめきがとけあったとき、その答えをみた。英語と日本語、シェイクスピアと能、そして人が生み出す尺八の音と自然が織り成す風の声とが、オフィーリアとハムレットにみる人と人との「許し」、つまりは「融和」であったのだ。 (高野 祥子、日本大学大学院修了 修士)

初めて ISHCC 大会に参加させていただきました。研究発表、ディスカッション、英語能公演と充実した2日間でした。特に、秋色に彩られた豊公ゆかりの能舞台での英語能は素晴らしかった。シテ：上田先生(ハムレット)、ツレ：宮西ナオコ、尺八：マーカス・グランドン、後見：足立禮子の豪華メンバーで繰り広げられた NOH HAMLET は古都の観客を魅了しました。私もカメラのシャッターが押せないほどの厳粛で聖なる体験をしました。

秋と観る 師が舞う 古都の能樂堂 ただし 直 (渡辺 直、日本大学大学院 院生)